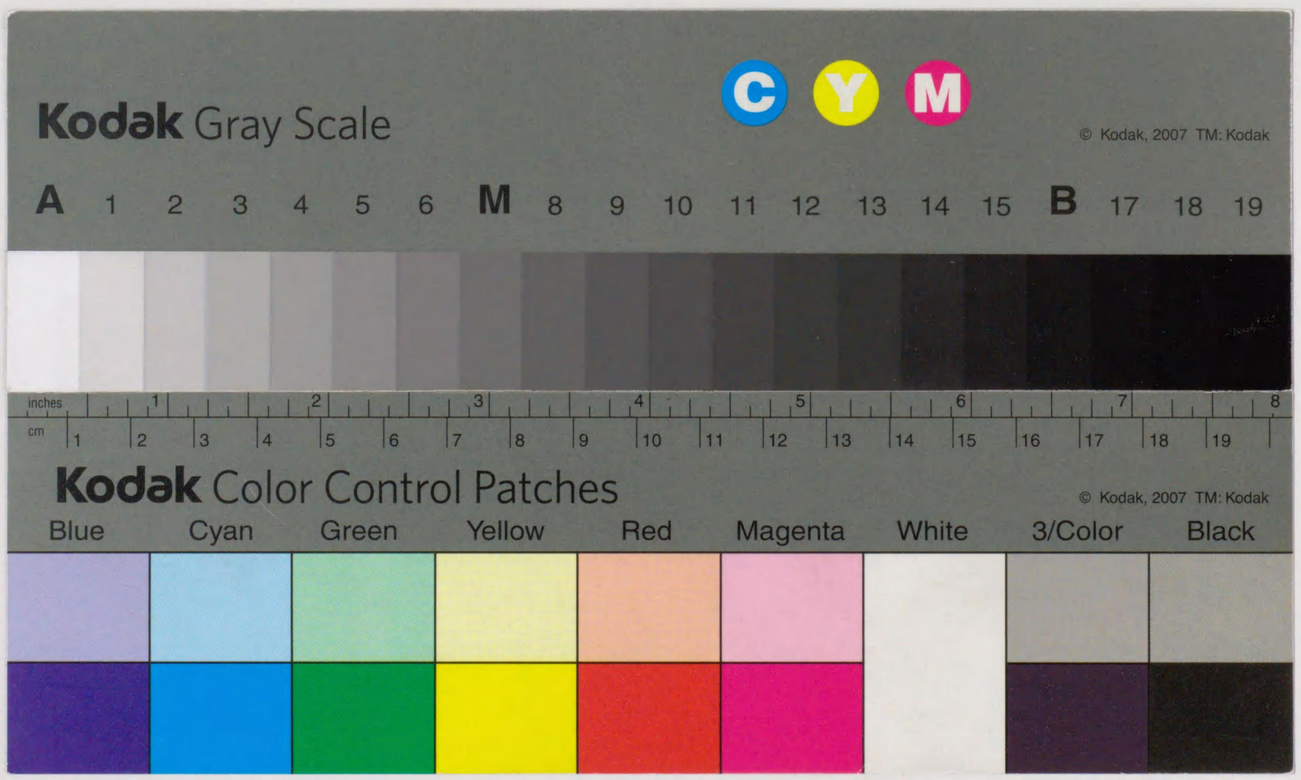

Kodak Gray Scale
C Y M
© Kodak, 2007 TM: Kodak
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19
inches 1 2 3 4 5 6 7 8
cm 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19
Kodak Color Control Patches
© Kodak, 2007 TM: Kodak
Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

562
57

562
57

562
57

希臘彫刻集

一氏義良編

アルカトゥッシ女人像

（前四大理石）

東京 アトリエ社 出版

562
57

アルカイツク女人像

（着色大理石）

希臘彫刻集

一氏義良編

東京 アトリエ社 出版

562
57

希臘彫刻概說

一 氏 義 良

1, はしがき
2, 特質とその時代
3, 最古の彫刻
4, アルカイツク前期
5, アルカイツク後期
6, 過渡時代
7, 黄金時代
8, 隆盛時代
9, ヘレニステイツク時代

562
57

562-57.

帝國圖書館藏書

1 はしがき

今から約四千年も昔のことです。アジヤの西北の高原地方にゐた白い皮膚の人種がさかんに大移動をなしてゐました。すでにその一部は南にくだつてインドやペルシヤに入つてゐましたが、他の一部はその頃から黒海に沿つてヨーロツパの東南に入り、幾つもの群になつて地中海畔へと迫つたのです。殊に、この紺青をたゝへた海に突出してあたかもひなたぼつこをしてゐるやうな、暖かいギリシヤ半島はこの移動民族の定住地として最もふさはしかつたのです。そこは山と山との間に、靜かにたゝへた灣をかこんで、ちやうど住み心地よい野と丘とが、いくつもかぎられてありました。さうしたところへこの移動民族はひとかたまりづゝ落ちついて、各自に獨立した都市的國家をいとなみ、農牧を主とする小部落生活をはじめました。そこは、オリーブと葡萄との實が寶玉のやうにみのり、海邊には貝と魚とが群れ遊んでゐるのでした。かくしてこのあまり大きくもない半島へ、ドーリヤ族、イオニヤ族、コリント族といつた風に、同じ言葉と同じ風俗習慣とをもつてゐる種族群が、つぎからつぎへとやつて來て碁盤に石をおくやうにみたしていつたのです。そして後ろから壓迫されるまゝに、前進した部族からは、さらに海を渡つて附近の島々へと分れて移りひろがりました。といふのは、このギリシヤの南東にかけてのエーゲ海にキプルスー、クレタその他大小の島々が、ちやうど碁石をぶちまけたやうに幾十も散在して、晴れた日にはそれらが半島から遠く近く見わたされるのみならず、波の靜かな時は小舟で島から島を漕ぎ傳はるのも、比較的たやすいのです。かくして、いつの間にか、あたりの島々もまた進取的なギリシヤ諸民族がこれを占め、さらに東進して、對岸なる小アジヤの岸々にも植民をはじめると共に、ずつと地中海を西に漕ぎいでゝ、シシリー島からイタリー半島の南岸などへも植民をしたのでした。もちろんその間に、かれらは農牧の民から航海運輸と商業工藝とにたけた文化人へと發達しつゝあつたのです。——さうした經過のうちに、このコーカサス高原から出でた狩獵と遊牧とのギリシヤ民族は、白人後來の大文

562
57

化の搖籃を用意するに十分な進歩をとげました。しかし、そこにはギリシヤ民族のみでなく、アジヤの西にはすでにかれらよりも强大で進歩してゐたペルシヤ民族が、同じ白人種として勢ひを得てゐました。そしてこの二民族の抗爭は、小アジヤ海岸の爭奪に端を發して、つひにトロヤの戰ひ（紀元前七〇〇年頃）、さらにペルシヤ人のギリシヤ侵入（紀元前五〇〇年頃）となり、その結果、ギリシヤ民族はその新興勢力をもつてペルシヤ民族をエーゲ海から押しのけて、こゝにいはゆるギリシヤの黄金時代を見たのです。そしてこの黄金時代こそ、ギリシヤ文化の圓熟完成した時ですが、しかしそれは比較的短い間でした。やがてアレキサンダー大帝が北の方マケドニヤからおこつて、このギリシヤ文化をアジヤ、アフリカ、ヨーロツパに廣くばつとかゞやかしたのも束の間、すでに勃興しつゝあつたローマ民族に壓倒されて、コリントの滅亡と共に古代ギリシヤの獨立的榮光に最後の日が來ました。それは紀元前一五四年のことでした。

さて、ギリシヤの彫刻は、上にのべたギリシヤ民族の經過につれて發展した、いはゆるギリシヤ文化の主要なものゝ一つで、哲學、詩歌、劇、建築、繪畫と相まつて、ギリシヤを文藝敎學の樂園たらしめたものです。しかも建築や繪畫の大部分が滅亡した今日も、よく當時のギリシヤ民族の思想と生活との美しさを遺すものは、かれらの手になつた數々の彫刻であります。のみならず、彫刻の質がすぐれて、量の多いこと、かのエジプトのそれと共に、人類の營んだ最高最大の業蹟たるに充分であります。そこで、これについてつぎに大體のお話をいたします。

2　特質とその時代

古代、または原始民族の多くがさうであるやうに、ギリシヤ民族もまた非常に彫刻を好みました。故にその質のすぐれてゐるのはもちろん、量においてもいかに盛んに作られたかは、紀元六〇——七〇年頃、ローマ人がギリシヤで大規模な掠奪を行つたのちにさへ、ローデスだけになほ三千の彫像がのこつてゐたさうで、他のアゼンス、デルフイ、オリムピヤなどにはそれ以上殘存したにちがひないといはれるのでも、想像されます。一人の製作量がいかに多かつたかは、有名な彫刻家リシツポスが一千五百の

彫像をつくり、しかもそのすべてが賞讃に價ひしたと傳へられるのでも知れます。大彫刻家フエイデイアスの作もまた同樣に多かつたらしいのです。

しからば今日のこつてゐるものはといふと、なるほどかなりに多いのです。ロンドンのブリテイシユ博物館は、十幾室がギリシヤ彫刻で占められてゐるし、ルーヴル、ベルリン、ローマ、ナポリ、コンスタンテイノープルなどの博物館にもかなり多いのです。まして、アゼンスには博物館二つが、ほとんどこれのみでぎつしりつまつてゐるし、ギリシヤ國内にも各地に數所の博物館が、主として彫刻のために設けてあるのです。そしてそれらの中には、なかなかすぐれたものも多いのです。しかしこれをありし昔のギリシヤの殘存物として見ると、まことに九牛の一毛にも及ばないのです。のみならず、それらのほとんど凡ては、作者の名が傳はつてゐません。ギリシヤには六大彫刻家をはじめ、實にすぐれた大家が雲の如くであつたけれど、今、かれらの眞作と確認すべきものはほんの一二にとゞまり、フエイデイアスやスコパスやの眞作といふものは一つもわからないのであります。たゞ、幸なことに、ローマ時代に、ギリシヤ古彫刻の特に有名なものゝ幾つかが、コツピーされたので、われらはこのコツピーによつて、ほゞ、かゝる大家の手法を想像することもでき、かれらの流派や傳統をも識別し得るのであります。

つぎにギリシヤ彫刻の材料と手法についてざつと申しますと、ギリシヤで最も古く用ひられた材料は木でありませう。ついでブロンズや大理石が用ひられだしたのちも木材がしばしば用ひられ、それに黄金を張つたり、彩色を施したりしました。また木材に象牙をはめた彫像をも作りました。しかしエジプトとちがつて氣候の關係から、それらは一つも遺つてゐないのであります。またブロンズが早くから用ひられました。ギリシヤ彫刻といふと、たれしも美しい白い大理石を想像しますが、クレタ島やエジプトやとの早い交通によつて、ブロンズの鑄造法は三千年前から心得てゐたのです。いな、或る人によると、リシツポス、ポリクレートス、ミロンなどは、石でなくてブロンズの彫刻を主として作つたとさへいひます。そしてこのブロンズには、銅と錫との外、金銀その他をも混じたらしく、それを精巧な蠟型につぎ込む方法や、部分づゝを鑄てから接合する方法やもあり、眼に玉を入れることも、エジプトの手法と同樣に

562
57

行はれ、それに美しい彩色さへ施してゐました。しかし、早く外人の侵入の際、金屬材料を得て武器などを造るために、これらは殆ど奪ひつくされたので、今日のこるところ極めて少いのであります。また石材については、ブロンズとならんで早くから彫刻に用ひられましたが、最初は石灰質の軟い石多く、それにほとんど木材と同樣な手法を施し、必ず極彩色を着けるのでした。のち、彫刻の道具が發達して精鋭となるにつれ大理石を刻むやうになると、その美しさにみちびかれて、また他の石を用ひる機會が少くなりました。けだし、ギリシヤとその植民地とには、この美しい大理石が實に豊富なのです。殊にエーゲ海上に相ならぶナキソス (Naxos) とパロス(Paros) との二島は、最もすぐれた大理石を出すので、初期の彫像はこの二島とその附近とで特別な發達をし、またギリシヤ各地で賞美されました。ついでアゼンスで盛んに彫刻されるに及んで、附近のペンテリコス(Pentelicos)大理石が多く用ひられました。それは黄色を帶びて、日にかゞやくと金光を放ち最もよろこばれました。しかしのちにプラキシテレスなどは、パロス大理石を用ひました。また南ギリシヤのペロポンネソス地方では、ドリアナに大理石山があつたけれど、こゝのは質がわるく、あまり用ひられなかつたやうです。この大理石彫刻には、彫刻家は原型を作る場合よりも、ぶつつけ彫りをする例多く、長方形のブロックに人體の輪廓を描き、それを大きく缺いで、廣刄の鑿や「きり」のやうなもので細かく彫つたやうです。そして磨きを平滑にかけることは、初期にはあまりしなかつたらしいのです。またコムパスを用ひて、他のものから寫したらしい、小穴を見ますが、これについては確說がありません。他に陶製彫刻(タナグラ)もあれどこゝには略しておきます。

さて、ギリシヤ彫刻の彩色でありますが、木像の場合には疑ひないことで、軟い石灰石(Poros)には紀元前第七世紀のものに着色を見ます。しかし石そのまゝでなくて、木材の場合と同じく「しつくひ」のやうなもので掩つてからその上に着色したやうです。好んで用ひた色は青と赤とで、レリーフの場合はバツクを青灰色にぬりました。材料が大理石に代つたのちも、着色するのを本體としたが、良質の大理石を用ひ、まゝ大理石そのものの美しさを感ずるにつれて、その度が減じ、顏面、頭部、衣服の紋樣を付けてくあつきりと色りました。しかし、アエイデイヤスやプラキシテレスなどさ

へ、決して白大理石のまゝのものは造らなかつたやうです。その意味は極彩色で美しく見せるよりも、色やその濃淡やで彫像の調子を示さうとしたらしいのです。色彩の飽和が極度に進歩した後の時代の好例は、アレキサンダー石棺のそれでありませう。

彫刻の用途による種類については、(1) 建築部分としての彫刻。これは神殿の破風(gable) のものが最も顯著で、欄間 (metope) と長押帶 (frieze)のものなどもあります。(2) 神像。(3) 奉献像。(4) 墓標。(5) 名譽像。(6) 單なる裝飾的彫刻。これは特に後期に多いのです。またこれを時代的に大別すると、

(1) 最古時代 (776 B. C. まで)
(2) アルカイツク前期 (540 B. C. まで)
(3) アルカイツク後期 (480 B. C. まで)
(4) 過渡時代 (450 B. C. まで)
(5) 黄金時代 (400 B. C. まで)
(6) 隆盛時代 (320 B. C. まで)
(7) ヘレニステイツク時代 (146 B. C. まで)

大略、上のやうに分けられますが、必ずしもさうはつきりしてはゐません。

また、ギリシヤ彫刻へは、クレタの影響と、そこを通じてのエジプトの影響と、アツシリヤ、ペルシヤおよび近東各民族の古來の影響とのいちじるしかつたことをあらかじめ知らなくてはなりません。こゝにはそれらを省いて、すぐに最古の彫刻から一瞥しませう。

3 最古の彫刻 (776 B. C. まで)

ギリシヤ最古の彫刻遺物は、ギリシヤ民族本來のものといふよりも、先住民族のもの、およびその影響をうけた原始的のものであります。これを普通にミケネ(Mycenae)時代の彫刻とよびます。ミケネはギリシヤの地名で、第十九世紀の末にそこでシュリーマン博士がこの時代の偉大な發掘をしたからかくよばれるのです。しかしミケネ時代美術の本源は、ギリシヤ半島の南の方に、東から西へ一文字に横たはるクレタ島であります。この島で紀元前三五〇〇年頃から特別な文化がさかえ、紀元前一五〇〇年前

562
57

後最高頂にあつたのです。その文化はエジプトの影響をうけることいちじるしかつたと共に、植物や動物を装飾化して描いた美しい壁面などに特にすぐれてゐました。また陶製、象牙製などの小さい女神立像の如き、きはめて近代的な彫刻もあります。このクレタ文化がギリシヤ本土にも影響した頃の遺物として、ミケネ、テイリンス(Tylins)その他から、すぐれた種々の彫刻が發掘されたのであります。

發掘物ではないが、ミケネ彫刻で最も有名なのは、ミケネの獅子門で、これは二頭の牝獅子(?)が、一本の柱の兩側から身を起してよりかゝつてゐる石彫です。頭部缺け、表面磨滅してゐるけれど、規模の雄偉さを知るに十分で、いかに當時のミケネ城主が威勢をもつたかをうかゞはれます。しかし彫刻的に見て、最も驚嘆にあたひするものは、一八八九年にスパルタに近いヴアフイオ(Vaphio)で發見された二つの黄金杯であります。これは古墳中の死者の左右に置かれたもので、何れも直徑、高さ、各八サンチぐらゐ、純金にて製し、把手は「コ」字形にとりつけてあり、その表面に肉の厚いレリーフとして、精巧な圖をあらはしてあります。その一つは人間と野牛との戰ひに、野牛が勝つてゐる圖、他の一つは人間が野牛を馴らして征服してゐる圖です。いづれも、構圖のとり方、寫實の確實さ、殊に彫刻技術の巧みさ、驚くべきすぐれたもので、一見現代人の製作かと疑ふ外ありません。(共にアゼンス・ナショナル博物館)

しかしこれらの、のちのギリシヤへの影響は明かでありません。むしろクレタ發掘の「豐年祭りの行列」は、初期ギリシヤの彫刻と一脈通ずる手法に、興味あるものです。これは小さい瓶の胴のレリーフで、多くの人物が各自植物のやうなものをかついで、大きい口を開いてうたひながら、前進する愉快な行列です。時代については明かでないが、紀元前一〇〇〇年よりも古からうとのことです。

その外、クレタ系統のものにはギリシヤ的な彫像などを見ませんが、かへつてエーゲ海諸島や小アジア地方に、プリミテイヴで、且つのちのギリシヤ彫刻と通ずるものを見ます。ヒツサーリツク(Hissarlik)の土人形、キプルス(Chiprus)のテラコツタ、キクラデス(Cyclades)の腕をくんだ裸體の小石像、ケロス(Keros)の笛吹きとハープ彈きの二人物などそれであります。

4 アルカイツク前期 (540 B. C. まで)

以上の先驅時代について、ギリシヤ民族が民族的特徴のある，且つすぐれた彫刻を表現するやうになつたのは、凡そ紀元前八百年頃からで、これをギリシヤ史上、第一回オリムピア大祭の年、すなはち紀元前七七六年以後と假定します。この時はすでにホーマーが詩にうたつたトロヤ戰爭も數百年前の昔語りとなり、ギリシヤの國運は日に日にさかんで、殊に植民地たるエーゲ海諸島や小アジヤ沿岸は最もさかえ、文化の見るべきもの著しかつたのです。されば當時の彫刻もまたこの地方で目ざましい發達をしました。その傳統、流派、時代については、まだはつきりした研究ができてゐません。たゞ、彫法が、東の方、つまり小アジアから海上諸島、それからギリシヤ本土のアゼンスあたへりと西漸し、そこにおのづから幾つかのタイプが識別されます。しかし地方的流派をなしたとは思はれません。

この時代の彫刻は概して單純です。しかし決して上記最古時代の植民地に見るやうな原始的なものでなく、人體の觀察もモデリングも、完全なものとしての表現も、すぐれたものがあり、りつぱに文化人の美術として賞すべきであります。遺物は石彫だけですが、あるものには木彫の形式と手法とが明かにのこり、初めは木と石とに、手法上の區別はなかつたかと思はれます。彫像のタイプは三種に分けられます。1. 裸體男性立像(アポロー・タイプ) 2. 着衣女性立像。3. 着衣男女性坐像、これであります。アポロー・タイプは古くからエーゲ海諸島とギリシヤ本土とに一般に見られ、アゼンス博物館の一室に多く集められてあります。(第一圖) アポロー・タイプの特徴は (1)長髪をうしろに垂らし、(2) 胸部に比して肩巾廣く、(3)兩拳をにぎつて腰につけ、(4)左足を右足よりも少し前方に出してゐます。これらの特徴はすべてエジプトの古い彫像に見るところで、明かにその影響であります。たゞ肉體は、エジプトのものに比してはるかに寫實的となり、殊に凸凹と面とを如實に寫さうとしてゐます。そして顔面の表情にも生氣が見へます。また時代の後のものほど、肉體と感情とに動きが見えますが、しかも大體はまだ靜止といふ主特徴を失ひません。眼の感じが特にさうです。圖の中心に大きくあらはされたものよりも、後方の三個がやゝ古いやうです。この大

562
57

彫像は更に變じて寫生本位となり、ギリシヤ的特徴ある圓滿平滑な肉體そのものゝ感じに移らうとする過渡期の作品で、堅實にして生氣を失はない、最も見るべきものであります。高さ三メートル以上の、なかなか雄偉なものです。

第二の着衣女性立像は、デロス發見の「ニカンドロ彫像」(Nikandre)(アゼンス・ナショナル博物館)が代表的のものです。それは男女の性もわかりかねるごく原始的な作で、たゞ長い衣裾の下から兩足先を舌のやうに出した特徴があります。これは木彫の手法の明かなものです。第三のタイプたる着衣男女性坐像の例としてはブリテイシュ博物館、またアゼンス博物館にいくつもあります。人像と椅子とが一つのブロックから、ごく單純に輪廓だけ刻み出され、また性的區分も不明確なものです。そしてエジプトの影響が顯著で、且つ多分、スフインクスのやうに多くを道の兩側に置きならべたものらしいのです。その規模の寬宏さ見るべきものであります。

以上の三タイプはみな靜止的であるのに、一方、もつと動的なすぐれた作品が各地で發見されました。例へばアソス(Assos)のレリーフ、デロス(Delos)のニケ(Nike)の像、エフエソス(Ephesos)の柱の基石のレリーフ、アクロポリス(Akropolis)のテイフオン(Typhon)の群像、同じく「羊を負ふヘルメス」(Hermes)の如きこれです。中にもデロスのニケ(第二圖)は、一八七七年にフランスの探險隊の發見したもので、もとはかなりの高さの壇上に立つた、「ニケ」すなはち勝利の女神が、翼を張つて飛翔する形であつたが、今は翼と手とを缺いてゐます。當時の名彫刻家アルケルモス(Archermos)の作とみとめられます。そこで彫刻の發達してゐたキオス(Chios)派の作例として、歷史的に價値あるのみならず、飛翔の感じを自在にあらはした、且つ顏面生彩に富む傑作と云はれます。つぎに「羊を負ふヘルメス」(Moschophoros)(第三圖)は、この「動く彫刻」たるギリシヤ的特徴が、アポロー・タイプの男性表現の理想と合致し、且つ圓熟した、實に驚くべき傑作であります。羊を負ふ者は、初期キリスト教に聖徒のシムボルとしてしばしば用ひられますが、ギリシヤで、さらにはエジプトで、神々に犧牲を獻じて奉仕する人として、宗教的表現が早くからあります。この像は一八六四年にアクロポリスで發見されたもので、紀元前六世紀初期の製作であります。實に「テイフオンの群像」と共にアゼンス初期の彫刻を代表するものであります。この像

のタイプはアポローから來て、左足をやゝ前に出し(缺)、且つ全身に衣を纏つてゐます。かつては彩色が施されました。目に白い物體ののこつてゐるのを見ると、眼はアポローやニケの如き描線式でなく、深くくりぬいて、更に一點の瞳を穿つて、そこへ玉眼を嵌入してあつたらしいのです。この負へる羊のすぐれてゐることを特に賞讃する人もあります。たしかにその眼や鼻や腰のあたり、單純に現はした感じはありますが、脚の表現に幼稚さがあります。(以上の作品の多くはアゼンスのアクロポリス博物館にあります。)

かゝるエーゲ海およびギリシヤ本土を外にして、當時のすぐれた作品の遺るのはシシリー島(Sicily)であります。この島のセリヌスのアクロポリスには紀元前六百年頃大神殿があつたらしく、一八二二年にイギリスの探險家の發見したメトープ三個は最も有名で、その一つ、アテナ女神の傍に立つ所で、ペルセウスがメヅサを殺す光景はその技巧と感情とにおいて、ギリシヤ彫刻史上特筆すべきものとされてゐます。(シシリーのパレルモ博物館)

シシリー島から更に西に進むと、イタリー中部の西岸エトルリヤ(Etruria)に、エトルスク彫刻として知られる特殊な表現があり、特にブロンズにすぐれてゐますが、こゝもすでに紀元前六七世紀頃からギリシヤ植民地としてさかえ、したがつて、アルカイツク・ギリシヤの古い一派からの分生と見るべきであります。(說明略)

5　アルカイツク後期　(480 B. C. まで)

かくして紀元前第八世紀頃から第六世紀の中ば頃までは、各地方のギリシヤ民族の彫像は急速な發達をなしました。そして紀元前五五〇年頃にはかなり見るべきものを製出しましたが、紀元前五四〇年に親ギリシヤ主義のペルシヤ王クロエスが倒れるや、かれの保護下でどこよりも彫刻の發達してゐた小アジヤのイオニヤ(Ionia)地方、——そこに彫刻の中心地キオス島(Chios)、サモス島(Samos)、ミレツス(Miletus)エフエスス(Ephesus)などがあつたのです——は、ペルシヤ人から大壓迫を蒙むることゝなり、彫刻家たちは次第に諸島や本國やその他へと移り行きました。しかしそれがまたイオニヤで發達した彫刻を各地に擴散させる結果ともなりました。その一例と

562
57

して、小アジヤも東にかたよつたリシヤ（Lycia）のクサンソス（Xanthos）で一八三八年に發見され、今ブリテイシュ博物館にあるハルピー（Harpy）墓碑のやうなすぐれたものがあります。これは高さ約六メートルの大きな角形一本石で、その上に棺室を置いた周圍にレリーフを施してあります。その正面一側の如きは人物の表現、實にすぐれてゐます。また一八六四年にエーゲ海のずつと北、マケドニヤに近いタソス島（Thasos）で發見されたアポローその他のレリーフ（ルーヴル博物館）も同じ傾向の作であります。これらによつても、イオニヤ派の彫刻がいかに廣く及んでゐたかを知り得るのです。しかし、イオニヤ派彫刻の美しさを最高度に、また最多數にのこして、ギリシヤ彫刻の精美を誇つてゐるのは實にアゼンスのアクロポリス博物館で、これを語ることによつて、アルカイツク彫刻そのものにふれるわけであります。

アゼンスがすでに早くから彫刻の一中心となり、殊にその城塞で守護神アテナ女神をいつきまつつたアクロポリスの丘を、數々の彫像もて飾つたことは申すまでもありません。そしてこの頃まで、粗石（Poros）を相手に彫刻の腕をみがいた名工たちは、今やイオニヤから逃れ來つた人々と彫刀のさえを競ひました。かくてその頃からアゼンの作風に一新時期を劃し、イオニヤ風の最も圓熟した驚くべき名作を遺したのです。ゼンしかし、かゝる至寶中の至寶も、ほとんど形なきまでに打ちかゞれ、破毀されたまゝ、土中に埋沒すること二千五百年、——のち、突如として現代の光りをあびたのは一八八六年から八九年までの三年にわたる大發掘に際してゞありました。實はこの大發掘によつて、數々の至寶が掘り出されるまで、人々はアルカイツク・ギリシヤの彫刻の精美についてほとんど知るところがなかつたのです。

それも一八八六年の二月の、或る一日だけに、頭部をも保存した十數個の女人像が、ギリシヤ國王の臨幸された發掘式に土から掘り上げられたのであります。そしてのちも、引きつゞいて無數の大小彫刻類は、アクロポリスの丘の地中到るところから發掘され、つひにそのために建てられた博物館にぎつしり滿つるほどになつたのです。その點數一千四百餘。

けだし紀元前四八〇年に、ペルシヤ軍がこのアクロポリスの丘を占領するや、輪奐の美をきはめた神殿をことごとく破壞蹂躙し、また掠奪し去つたのであります。しかる

に、ついでアゼンス軍の大勝利により、ペルシヤの侵入者を追ひ拂つたのち、大政治家ペリクレスが出現して、國政を振興し、紀元前四五〇年頃から再びアクロポリスの丘の大造營に着手しました。そして舊に倍する輪奐壯麗を極めるものといたしました。この再興に際して、ペルシヤ人が破毀した舊建築や舊彫刻は、丘の地中深く埋めて、その上に新しい營造をしたのです。この埋沒物こそ、こゝに語るアルカイツクの至寶そのものなのであります。

アクロポリス發見のアルカイツク女人像は顏面の完いものゝみでも三十に近く、それらは一見同じタイプのやうで、しかも髮樣、服裝、手法、表情など、一つ一つに異り、實に興味ある研究ができます。一九二六年四月こゝに訪れた一週間、最も強く心をひきつけられたのはこの數々の女人像でありました。これらの女人像はみな、ほとんど等身よりやゝ小なる着色大理石で、全身完全なのは一つもありませんが、或る像は着色比較的鮮かに殘つてゐます。本集に原色版としてお目にかけたものゝ如きその尤なるものであります。これらの像の造られた目的は明かでありませんが、おそらく守護神アテナ女神に念願あるか、または特別な理由から、女神のためにさゝげたもので、必ずしも巫女とか特定女人とかの肖像ではありますまい。但し、この中たゞ一個、巫女の名の見えるものがあります。また妙齡の少女像の多いことを見ると、アテナ女神の奉仕たる意味があつたのでせう。但しその製作の年代には新舊あるらしく、直立せる少女像（第四圖）最も古い樣式を思はせ、顏面はデロスのニケ（第二圖）に似て更にいきいきと生氣があらはれ、鼻と目と、殊に脣の美しさを感じます。脣は兩端をやゝ上向きに、いはゆるアルカイツク・スマイルを輕くあらはします。このアルカイツク・スマイルは、古代彫刻の特徵で、エジプト彫像の多く、またわが法隆寺夢殿救世觀音像などにも見る、一種の神秘的微笑であります。兩側から胸に垂らしたぶる線の髮もまたエジプト彫刻を思はしめる古樣式で、簡素でしかも彈力性の軟みを失はない胸から乳のあたり、きりつとしめた腰からすらりと流れる脚部の感じ、またとない一つの單純美を示します。この樣式が木彫から來たことも察せられます。ほのかに青黑く、また赤く、幾點の彩色のあとを止めてゐます。この像から轉じて、完全着彩のものを見ると、いかにコントラストをなして複雜化されたことでせう。實は、第

562
57

四圖の女人像はイオニヤ派の影響あるとしても、なほ前の「羊を負ふヘルメス」(第三圖)と相通じて、アゼンス古來の傳統を止めますが、この第四圖はまつたくイオニヤ式であります。全身を被つて且つひだの多い服裝は、イオニヤなどに見るところで、したがつてこの流暢で複雜した服飾の彫刻的表現は、この派で最も發達した一特徴なのです。加ふるに、この像には青赤などによる美しくデリケートな紋樣をこつてりと施されてあります。顏面は第四圖の美しさとは異り、眉根口元、引きしまつた頰のあたりなど、男性的の勁さをうかゞはれます。前者に比して時代もやゝ降りませうが、作者の個性もおのづから知られます。また前者の左手、この像の右手は、腕がとれてゐます。これだけ別に作つてさし込んであつたのです。そしてこの前にさし出した手に小鳥などのさゝげものを携へてゐたのです。

つぎに第五圖は、これこそこの博物館を訪れた連日、低徊去るあたはずして、したしみながめた對像であつたのです。これまで目にした女人像の中、カイロ博物館のネフレト夫人像を外にしては、これだけ心をひきつけられた彫像はないのであります。こゝに示したやゝ下部、膝のあたりから折れて、兩腕もなく、鼻と顎とも缺けてゐますが、何ともいへぬしとやかさ眞正直さで　どこにも氣どつた美しさはないけれど、女性そのものといつてよい親しさ、愛らしさ、なれなれしさ！　しかも凛として犯しがたい表情にあふれてゐます。殊に、あのしづかに、無心に、且つ人間としての情感をたゝへて、わづかのうるほひにじつと前方を見つめる眼ざしは、神や、理想からでなく、生みの母からのみ受け得る情愛といふ外はないのであります。この前に立つて一二時間もたゞじつとしてゐれば、それだけで心をみたされることができました。

第五圖に示したのは、更に發達した技巧と表情とを見ます。母性らしい圓滿豐富な面貌で、口もとしまり、眼もはつきりかゞやき、理知の光りを見ます。顏、頭、肩すべてふつくらとした圓みをもち、胸にかゝつた髮のぶる線もゆたかであります。これを見るとすでにアルカイツク彫刻といふよりも、知情の完成圓現を理想とした黃金時代のギリシヤの特徴があります。殊に神秘的なアルカイツク・スマイルは失はれました。しかし髮樣ひだなどは、依然としてアルカイツク・スタイルを追つてゐます。

これまで語つたアクロポリスの彫像はイオニヤ派のスタイルを追ひましたが、紀元前四八〇年直前の頃、いちじるしい變化が見えます。それはアゼンス本來の一派が再び擡頭したのか、他のもつと堅實なドリヤ(Doria)派などが入り込んだのか、女人像の表現にさへも、ちがつた傾向を見ます。第十四圖として揭げた「少年の首」(アポロー?)もその一例です。これは頭髮を黃色に塗つてあるが、その色のまざまざと殘るのを見れば、ペルシヤ人破毀の直前の作と見るべく、またその技巧がこれまでのものよりはるかに發達してゐるのを知ります。唇や眼のすつと寫生的となつたこと、頭髮の表現の美しさを加へたことなど、特にそれを感じます。——かくて、アゼンスはペルシヤ人の戰火にひとたび滅びたが、そこから再生した第二のアゼンスこそ、全く新しい時代の出現であつたのです。

なほ、これらの女人像その他は、アクロポリスの神殿をめぐつて、數メートルの大石製臺座または柱に据ゑて並列されたもので、その頭上にはブロンズの柄をすげた木製圓盤を背後から立てかけてありました。これはアテナ女神にさゝげた犧牲を啄むべく來る鳥類のとまるのを防ぐためでありました。そしてこれがわが佛像の光背と關係あることは、推古佛の光背の樣式にて察しられます。また當時の作品として、アクロポリスには、更に偉大な幾點があります。それはペルシヤ軍に破毀された大神殿破風にあつた彫刻遺物で、そのアテナ女神が怪人を退治するものは、のちのパルテノン神殿の破風遺物(ブリテイシュ博物館)以上に注目すべきであります。

第十一圖「ヘルメスとニムフの行列」も、そのやゝ初期に屬するすぐれたレリーフで美しい着色のあともこつてゐます。第七圖「梟」第八圖「熊の頭」第九圖「メヅザの假面」もまたアクロポリスで發見された同じ頃の作品であります。第十圖「男の首」は、アゼンスに近いエギナ島(Egina)發見のもので、頭髮、ひげの技法の特異さを注目すべきであります。たぶんこれは未完成のものでありませう。第十二圖「若い戰士の裸體像レリーフ」(最古の墓標の一つ)と第十三圖、コリンス灣(The Gulf of Corinth)發見の「ポセイドン立像」(ブロンズ)とも、同じ頃の作と見てよろしいでせう。第十五圖「犬にたはむれる老人」のレリーフは、ギリシヤ本土で、アゼンスに近いボエオテイヤ發見のものですが、作者はナキソス島の出身です。粗大且つ不精確な手法を見ます。兩足や犬の形は非寫實的だが、あらく强い衣服の襞や、顏面の表情

562
57

や犬の顔やに、アゼンスの都會藝術には見られない生氣を感じます。

6 過渡時代 (450 B. C. まで)

ペルシヤ戰爭にさきだつ、彫刻家の活動したアルカイック後期から、黄金時代に移る中間三十年ばかりを、別に過渡期と見ねばなりますまい。この間のアゼンスは政治的に重大時期で、寡頭政治から民主政治となり、將來の繁榮の道を開いたのですが、彫刻もまたイオニヤ派の影響を脫して、堅實で圓滿な獨立したアゼンス的理想の實現を見るに至りました。その代表作としてナポリ博物館にそのコツピーのある「ハルモデイオスとアリストガイトンとの群像」があります。この二人はアゼンスの專政君主を倒した愛國の士で、その像をアゼンスでブロンズとして建てられましたが、原作は滅んで、コツピーを遺します。顏面、肉體ともに重くして、且つ目耳、筋肉の活躍など寫生を十分に行ひ、しかも沈重です。

アゼンスで作られたオリジナルは一つも遺つてゐませんが、幸にデルフイ(Delphy)の「戰車御者」(第十六圖)として有名なブロンズ立像が、この時代の製作の特徴を示して遺憾ありません。時代は紀元前四七七年で、愛國志士像とほとんど同じ頃であります。これは四頭の馬にひかれた戰車に、御者たるかれと、かれの主人と二人の少年とで騎してゐる群像として、石臺上に置かれた、すこぶる大規模なものでありました。今は斷片の外、御者像のみが遺ります。この像を見た時、男性美の極致こそこれではないかとさへ感じました。同じ男性美でも力の表現にはミケランゼロあり、思想の表現にはロダンあれど、勇氣を胸にしづめて、泰然自若と構へた冷靜な男性の面構へは、他にまさる作品を見ません。殊に炯々とかがやく眼、今にも動かんとし凛たる意氣を含む唇、流れんとして澱む衣紋の襞など、まことに傑作とよぶに充分と思ひます。繩をあやどつたやうな風俗や鉢卷も特別な興味をひきます。彫刻史上ブロンズの最大代表作と申すべきでせう。

これは當時大規模なものであつたデルフイ神殿に飾られたのですが、同じ頃最も有名な運動競技の場所として、また大神殿として知られたオリムピヤには、さらに多くの彫像があつたのです。一八七七年から八一年にかけての大發掘により、驚くべき結

果を出現しました。中にも神殿の東と西との破風にあつた彫刻グループは、大部分破壞された斷片のみではあつたけれど、第十七圖の「アポロー像」の如き、こゝの彫像の特徵を知る最適のものであります。これは西の破風の中央に立つたもので、高さ約三メートル、左手に弓をもち、のばした右手にはセントールと戰ふ全軍を指揮してゐる有樣であります。この像で感ずることは「戰車御者」と同樣に冷靜堅實で、しかも一段の高貴さをもつことです。像の毅然たる表情は最高指揮者としてのアポローを示すと共に、そこにまたギリシヤ的の圓滿玲瓏さを失はないのであります。これはたぶん紀元前四五六——七年の作でありませう。

この大神殿にはメトープのすぐれた遺物も幾つかあつて、過渡時代の藝術を止めますが、それより一層有名なのは、ローマのテルメー博物館にある「アフロデイテ(ヴイナス)誕生」のレリーフであります。これはイタリーのルドヴイシ村で一八八七年に發見されました。祭壇であつたらしい三枚よりなり、正面は海から生れ出でるアフロデイテを、二人の侍女が兩側よりひきあげようとする有樣で、その左側の一枚は裸女が二管の笛を口にし、右側の一枚は聖衣をすつぽりかぶつた女が香を焚いてゐます。いづれも女神の出現を祝してゐるかの如くであります。(第二十一圖)、またおそらくこの時代に屬すると思はれる「とげをぬく少年」(Spinario)があります。競走する一少年が走り終つてのち足にたつたとげをぬいてゐる感じをよくあらはしたものです。數種のコツピー中ローマのカピトール博物館にあるブロンズ製のもの(第二十二圖)を最良とします。——なほこの時代に大彫刻家としてピタゴラス(Pythagoras)とヘジヤス(Hegias)とが知られてゐれど、かれらの眞作と思はしいものは遺つてゐません。

7 黄金時代 (400 B. C. まで)

ギリシヤ彫刻の黄金時代は、紀元前四五〇年代からであります。ピタゴラスとヘジヤスとは、すでに老大家でしたが、新時代の三大人物たるミロン(Myron)、ポリクレイトス(Polykleitos)、フエイデイヤス(Pheidias)、は、あたかも冴えた腕をそろへて、競つてゐたのでした。中にもミロンは、有名な「圓盤投げ」(Diskobolos)(第十八圖)によ

562
57

つて知られてゐます。

ミロンはアルギヤ（Argia）派の名彫刻家ハゲライダス（Hagelaidas）の弟子で、また同じ派の第一人ヘジヤスの影響もいちじるしいといはれます。主としてアゼンスにあつて仕事をなし、そこのアルカイツク風をすつかり改めて、强健圓滿な新時代の藝術たらしめました。かれの製作は多くブロンズであつたけれど現に遺るものは大理石のコツピー二個であります。最も有名な「圓盤投げ」（第十八圖）は、ローマのナショナル博物館にあるものを最良のコツピーとします。それは强健な一青年が、滿身の力を右手にこめて、重い圓盤を遠いかなたに投げやうとする、刹那の緊張を、いきいきと、劇的に表現するものであります。肉體、腕、顏に、あらゆる男性美をあからさまに誇張して示します。實にギリシヤの運動競技が生んだ藝術最高の一つであります。アルカイツク時代にはほとんど見なかつた激しい運動の表現は、ペルシヤ戰役の前後から白熱化されて、戰車御者」や「とげをぬく少年」となり、つひにこの一傑作に結晶しました。肉體の激しい運動を表現して、これに及ぶ彫刻は他にありますまい。殊に同じくハゲライダスのアルギヤ派から分れ出でながら、ポリクレイトスの組織主義（セオリズム）、フエイデイヤスの現想主義（アイデアリズム）に對し、現實主義（リアリズム）と評せられるかれの特色は、この像に最もよくあらはれてゐます。

タルソス（Tarsos）で發見されて、今コンスタンテイノープル博物館にあるブロンズの「青年像」（腹部以下缺）（第二十八圖）もまたかれの作と見なされます。その顏面や頭髮の表現は殊に「圓盤投げ」と似てゐます。若しこれがかれの作だとすると、ミロンのブロンズの大體を知る好例とすべきであります。

つぎにポリクレイトスの作のコツピーとしては、これもよく知られる「槍かつぐ人」（Doryphoros）がナポリ博物館に、「勝利者」（Diadumenos）がブリテイシュ博物館に、女兵（Amazon）がベルリン博物館にあります。「槍かつぐ人」は一七八九年にポムペイの廢趾で發掘され、それ以來この作者の名を世に注目させました。かれはギリシヤ彫刻の「法則」（Canon）の創定者と思はれるほどに、彫刻を科學化させた人であります。さればこの「槍かつぐ人」も上體、下體、腕と脚、重みなどのプロポーションをよく研究してあり、同じ競技者をも、ミロンは力の表現として刻み、ポリクレイトスは人體の構造として彫つてゐるところに對照があります。故にかれは、「人間としてでなくて、人間の肉體として」作つたといはれます。

最後に三人中の最大天才フエイデイヤスがあります。かれの大名はつねに聞えてゐたし、また新パルテノン神殿の彫刻はたとひかれの手にならないとしても、かれの影響のいちじるしさを想像されましたが、しかもミロンやポリクレイトスのコピーの如くかれの手法を髣髴させる何物もありませんでした。しかるに一八九一年に、フルトウエングラーが、フエイデイヤスからのコツピーである「レムノス（Lemnos）のアテナ像」（ドレスデン博物館）を發見して以來、ほゞ見當がついたのであります。又、フエイデイヤスの手法を最もよく思はせる傑作は、パルテノン神殿に置かれたであらう「パルテノン・アテナ」（Athena Parthenos）のコツピーで、これにはいくつかある中にも、一八八〇年發見のヴアルヴアケイオン（Varva keion）の像（第十九圖）が最も有名であります。原作は十數メートルの巨像ですが、これは約一メートルのもので、且つローマ時代のコツピーです。比較的製作にも注意され、十分磨いてもあります。顏面はやゝテイピカルで生氣に乏しけれど、しかも端嚴莊重なこの女神の感じを失ひません。殊に頭にいたゞいた兜はよく彫刻されてあります。それは二つの翼ある馬（Pegasoi）の中間にスフインクス（Sphinx）がひざまづき、その各の頭部にいたゞいた鳥冠形は、女神の背面にたれてゐます。胸あてをかけ、それに蛇のいくつかとぐろをまいてゐます。右手に勝利の使者たるニケ女神をのせ、左手を「アテナの盾」にかけます。盾との間には女神のシムボルたる蛇が添へてあります。——フエイデイヤスは實に、この一生の大作に、アゼンスそのものゝ形成者である大女神を最高の理想體として表現するのみならず、また黃金時代の榮華の最高頂にあつたアゼンスの光輝を具體化したのであります。この巨像は全身に燦然たる金光を放ち、また五彩を加へてかゞやいてゐたにちがひありません。——かゝる大傑作をのこしたフエイデイヤスも、親友ペリクレスの失脚に連座して[illegible]がれ、いたましき最期をみたことを思へば、アゼンスの榮光の半面の暗黑と、[illegible]家の運命とを想はずにゐられません。

フエイデイヤスを語ればいきほひパルテノン神殿の彫刻に及ばなくてはなりません。パルテノン神殿、およびそれの建つてゐたアクロポリス丘については語る必要は

562
57

ありますまいが、こゝこそ、フエイデイヤスが、數年の心血をそゝいだところであります。殊にロンドンのブリテイシュ博物館には一八〇〇年の頃エルジン卿によつてもたらされたパルテノン神殿の遺物が數室をしめ、もつてフエイデイヤス一派の製作のあとを知るのであります。

それらは主として神殿のメトープとフリーズと破風との彫刻であります。まづ破風から語りませう。ギリシヤ神殿で、どこでも最も偉觀を示すのは破風の彫刻飾りで、こゝでも長さ三十メートル、中央の高さ三メートル、そこに數個の大彫刻が立ち踞し臥してゐるのです。但し現存遺物はいたいたしくも破損磨滅されて、わづかに昔の俤を傳へるにすぎませんが、さすがに雄偉な姿態、感嘆にあまりあります。その東の破風は、アテナ女神出現後の光景で、テセウス(Theseus)と見られる青年と、三つの運命女神と想像される首のない三女のグループと馬の頭と(何れもブリテイシュ博物館)が最も有名であります。最近、アクロポリスの地中やデルフイ、オリムピヤ等の神殿趾などから、幾多の發掘を見るまでは、これらが代表的なギリシヤ彫刻とされたものです。いはゆる「テセウス像」は、足尖と手尖とが折れた外は、男性肉體の表現として模範的のもので、「運命の三女神」もまた、頭こそ失はれたれ、腰かけ、またよりかゝつたポーズと、ゆたかに肉體を包んだ衣裝のひだの美しい表現とは、アルカイツク時代のイオニヤ式手法が、かくまで發達したかと驚かれるのであります。「馬の頭」も完全に保存された當時の動物題材として、ゲーテが「Ur-Pferd」(本來の馬)と激賞したのもうなづかれます。兩方の破風は、どこの例も同樣に、東方ほど力作でありませんが、さすがにその「イリンス」、「ニケ」などゝよばれるものはパルテノン破風の名にそむかないものです。

つぎに逸すべからざるは有名なフリーズであります。これは神殿內陣の外側をめぐる欄干の上部にあつたもので、アテナ女神に新調の神衣をさゝげるべく、アゼンスの妙齡の處女たちが行列をなして練りゆく光景をレリーフにしてあります。レリーフの連作としてはエジプトをのぞいて、これに匹敵するものがありません。高さ、巾共に約一メートルのもの、百七十餘メートルにおよびます。まづ犧牲となるべき大牡牛が幾つか先行し、ついで羊、さゝげ物の飮食をかつぐ人々、彈奏する樂人の一隊、市の名

士と見える長者の一團、やがてはやる駒をならべて戰車を驅る青年軍士のむれ妙齡の乙女のひとつゞきなど。その馬隊の數列にわたり活躍する光景最もめざましく、馬と人との種々のポーズを活寫して遺憾がありません。但しその大部分は失はれてゐます。こゝに示すのも(第二十四圖)は一部で、美はしき行列の光景をば、ポセイドン、アポロー、アルテミスの三神が、うれしげに眺めながらうち語らひつゝあるさまであります。(フリーズの一部はブリテイシュ、一部はアクロポリス博物館にあり。)つぎにパルテノンのメトープは、主として勇士とセントールとの戰ひを示したもので、もと九十二枚ありましだが、その四十一枚を原場に止め、他の數枚を各博物館に保有するだけであります。

アクロポリスの丘で、パルテノン神殿彫刻と共に語るべきはその北方にあるエレクテイオン(Erechtheion)の柱像(第二十五圖)であります。これはエレクトハイムの神殿で、その玄關に、女人の形をした六本の柱が立つてゐます。(一本は失はれ、一本はブリテイシュ博物館に運んだので、テラコツタで補つてあります。)もちろん建築構造の用をなすけれど、その女性表現の精美さはパルテノンのそれらにまさるとも劣りません。殊に女人像を柱に應用することは他に類例の少いものであります。

當時の作品として他にも多く遺る中に、いはゆる「嘆きにあるアテナ女神」(第二十圖)がアクロポリス博物館にあります。このレリーフは、女神が武裝して槍をたづさへ、素足のまゝで、墓石の前に身を斜めにして立ち、悲しさうなおももちして墓石を見おろす姿態であります。またアゼンス彫刻として忘れられないのは、市の西北のはづれのデイピロン(Dypilon)の古代の墓地やそこのナシヨナル博物館にある多くの墓標であります。これは紀元前第五世紀から第四世紀にわたるもので、その多くは死者が生前のままに椅子により、そこへその配偶者や子供たちが訪れてゐる、親情と哀愁とにみちた光景などで、惻々として觀者を動かします。こゝにその二例を示します。(第三十一、三十二圖)

3 隆盛時代 (320 B. C. まで)

さしもにほこりをきはめたギリシヤ文化の黃金時代も、やがて國內の紛亂につれて

562
57

動搖の時が來ました。しかし彫刻は、前からの膂力と新しい趣味性の發展とにより、一層さかんな面目を發揮しました。殊に紀元前第四世紀にはスコパス（Scopas）プラキシテレス(Praxiteles)、リシツポス(Lysippos)の三人が黄金時代の三天才の如く、轡をならべて馳驅しました。かれらの傾向は内容よりも技巧本位で、それだけに技巧には空前の發達と圓熟とを見ましたが、同時にたゞ人體の外皮をうつし、且つマンネリズムに墮したのは、轉落期として止むを得ないのであります。

それらの中で最も著しくギリシヤ的理想を高揚したのはスコパスであります。かれの眞作として遺るものはありませんが、一八七九年に、ミルヒホエファーが、紀元前三九五年頃スコパスによつて改造されたと傳へるテゲヤ（Tegea）のアテナ・アレア(Athena Alea)神殿を發掘して得たいくつかの首の特徴で、ほゞ、かれ一派の傾向を知り得ます。それは、のちに語るプラキシテレスとコントラストをなし、またこれまでのギリシヤ彫刻の何れとも異り、顔面短くして横巾ひろく、しかも力強い、物すごい表現をなし、口短く鼻平らに、殊に烱々としてかゞやく眼は、眼窩深くくぼんで眼球まるく、プラキシテレスの軟かで夢みる如きとは全く異ります。この特徴が知られて以來、かれの派の作と證せられるもの多い中で、最も有名なのは、小アジヤのハリカルナツソス(Halikarnassos)にあつて、古代七不思議の一といはれた「モウソレウム」(Mouseleum)の、モウソルス王夫妻の像（ブリテイシュ博物館）であります。

スコパスと同時代の人で、きつすねのアゼンス人として、またフエイデイヤスについで知られる大家としてプラキシテレスがあります。かれは女性を彫刻して最も得意であります。その眞作の世にあらはれたのは一八七七年、オリムピヤから發掘の「ヘルメス」(Hermes)（第二十六圖）で、これは彫刻史上に一時期を劃する作であります。けだし、上にあげた諸大家の眞作と確認すべきものは一つもないところへ、突如としてかれのサインのあるこの作が現はれたのです。必ずしもかれの代表的傑作ではありませんが、しかも神の使者たるヘルメスがゼウス神よりあづかつた幼兒デイオニソスを、あやしながら抱いて遠くへ旅するすがたは、いきいきとして寫し出されてゐます。肌美しい大理石に刻まれ、頑是ない小兒にたはむれかゝる、半ば夢見たこの勇士のおもざしは、たとへやうもないローマンテイツクなものです。これこそギリシヤ

頽廢期の生んだ幻想藝術家の名にふさはしいものです。さればこそ、あの「クニドスのアフロデイテ」（ローマのヴアテイカン博物館）や「大理石のフアウン」（ローマのカピトール博物館）やの作者であります。殊に「プラキシテレスのS」とよばれる身體のひねり方の魅力は、最も觀者をひきつけます。また一八八八年にマンテイネイヤ(Mantineia)で發見された三つのレリーフ（その一つは第三十三圖）も、かれの手法があります。アポローが樂器をかきならすと、そこへマルシヤス(Marsyas)が來て兩管笛を吹奏するのを、フリジヤ(Phrigia)人の一勇士が立つて、アポローにいどむ者を殺さうと身構へしてゐる圖であります。

最後にギリシヤ六大彫刻家の第六人者としてリシポスがあります。プラキシテレスとほとんど同時代の人で、その表現に力のこもつたこと、むしろスコパスに似てゐますが、しかも肉體のやはらかさに、プラキシテレスと同じく時代相を察せられます。かれはフエイデイヤスの如き理想家でないと共に、プラキシテレスの如き肉體のための肉體主義者でもなく、むしろ人體の自然をありのまゝに寫さうとしたリアリストであります。かれの作のコツピーとして有名なのは「汗をこく人」(Apoxyomenos)で、それにはかれが、ポリクレイトスの法則「頭部は全體の七分の一」を破つて、「八分の一」とした實例が見えるとされます。しかしローマのヴアテイカン宮殿にあるこの作が、果してかれのものゝコツピーかは最近疑はれてゐます。――これで、最盛期を飾つた三人を終りましたが、この時代の遺品と思はれるものは他に多數あります。第二十七圖に示すアゼンス發見の「アテナ女神の首」の如きこれであります。

なほ、この時代の末期に屬するものとして語らねばならぬのは、小アジヤのシドン(Sidon)で發掘のアレキサンダー石棺（第二十九圖）であります。一八八七年にハムデイ・ベイはこの地で二十二個の大石棺を發掘しました。そのあるものは紀元前第五世紀に屬しますが、大部分は第四世紀のものです。中にも最もすぐれた彫刻のあるのがこの「アレキサンダー大石棺」で、現にコンスタンテイノープル博物館の廣間の中央に安置され、訪者の目を驚かしてゐます。これは全部が極めて美しい宮殿形に造られ、各種の彫刻模樣精彩を放ち、その兩側面には高肉のレリーフでアレキサンダー大帝の業績をあらはします。圖に示した側面左端にあるのが、青年大帝の騎馬像でまさに劍を

562
57

揮つて敵に當つてゐます。別圖はその擴大であります。その相亂れて戰ふ各人の姿態形相、表情と活動と眞に迫り、しかもきはめてデリケートな刀法、圓熟精妙の極にあるものです。加ふるに全面にわたり、黃、青、赤、各種の色をもつて、調子よく着彩されてあります。これぞ大帝の大業を永世に傳へる好乎の記念物といふべきであります。但し大帝の遺骸はこゝに葬られなかつたから、おそらくこれはその重臣將軍中の一人のものでありませう。

9 ヘレニスティツク時代 (148 B. C. まで)

アレキサンダー大帝の死後、すなはち紀元前第三世紀に入つて、世界の形勢はまつたく一變してしまひました。それは、この三四百年來ギリシヤが勢力の中心であつたもの、今や地中海をめぐる國々——東ヨーロツパから西アジヤ、北アフリカにかけて、勢力の分散を結果したのであります。それにつれて、さしもに光被したギリシヤ文化は、アレキサンダー大帝の遠征以來、各地に大擴散をなし、こゝにいはゆるヘレニスティツク (Helenistic) 文化世界の出現を見たのであります。彫刻においてもさうであつて、すでにギリシヤのアゼンスやアルゴスやシキオンはその中心でなくなり、むしろひろく海外、殊に西アジヤ地方にさらに別趣のすぐれた表現を見るに至つたのであります。ペルガモン (Pergamon)、トラレス (Tralles)、アンテイオク (Antioch) の如きこれであります。そしてそれらの地でつくられたこの時代の彫刻遺物中、最も有名なものは「ベルヴエデレのアポロ」「ミロのヴイナス」「死ぬるゴール人」「ニオベのグループ」「ラオコーン」「フアルネセの牡牛」「サモトラケのニケ」「ペルガモンの神壇彫刻」などでありませう。今はその一々に說明を加へる餘裕がありませんから、ざつと語つておきます。

その最初にあげなくてはならぬのは、サモトラケ (Samothrake) のニケ (Nike) 像であります。これは今ルーヴル博物館ギリシヤ彫刻部の階段の中ほどに置かれ、長さ四メートルばかりの舟形の上に、翼をひろげた女神のすがたで立つてゐますが、惜しいことに顔も手も缺け、したがつて海風に向つて吹きならした笛もありません。しかしその姿態、殊に衣襞の表現にいたつては他に見ないすぐれたもので、ヘレニスティ

ツク時代の造型を代表するものといつてもよろしいのです。つぎに一八二〇年に農民がメロス島 (Melos) で發見したヴイナス、すなはちアフロデイテの像は、これもルーヴルにあつて「ミロのヴイナス」の名を知らない人はありますまい。これもまた世界的の傑作で、」のニケと同じ系統の手法に屬し、さらに溫雅な肉體的表現を示すものであります。「ニケは女性の力づよい動作を、アフロデイテはその神の如きレポーズを示す」ものといはれます。

つぎにペルガモンの諸彫刻は、近年ドイツ發掘隊が、小アジヤで得たもので、ベルリンには、このコレクションのみで美術館ができるぐらゐ多數あります。製作もまたすぐれてゐます。これと同じ種類のもので有名なのはローマのカピトール博物館にある「死なんとするゴール人」であります。最後に「ラオコーン」は、ギリシヤ神話より題材をとつたもので、レツシングが賞して以來、最も有名になりました。その悲痛凄愴の表現、他に見ないものでありますが、彫刻としてはむしろ文化の末期に屬することを示すものであります。同じやうな「フアルネセの牡牛のグループ」はナポリ博物館に訪者の眼をひいてゐます。——以上で、ギリシヤ彫刻に關する。ほんの梗概を了ります。

——一九二六・一二・七——

562
57

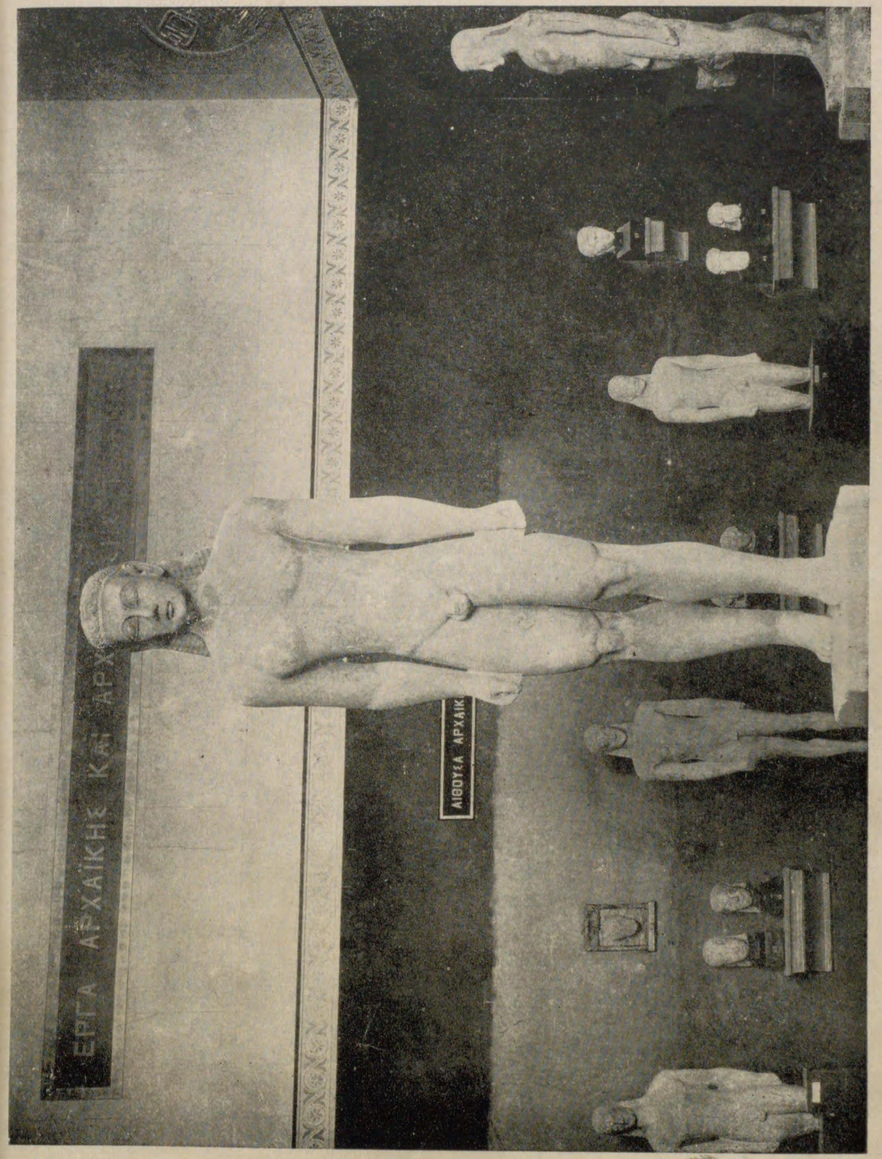
希臘彫刻集目次

三　色　版

アルカイック女人像(着色大理石)……アゼンス・アクロポリス博物館

一　色　版

アルカイック・ソウニオンのアポロ立像(アゼンス・ナショナル博物館)…… 1
デロス島のニケ像(アゼンス・ナショナル博物館)…… 2
羊を負ふヘルメス(アゼンス・アクロポリス博物館)…… 3
アルカイック女人立像(アゼンス・アクロポリス博物館)…… 4
アルカイック女人立像(アゼンス・アクロポリス博物館)…… 5
アルカイック女人立像(アゼンス・アクロポリス博物館)…… 6
アルカイック・鳥(石像)(アゼンス・アクロポリス博物館)…… 7
アルカイック・熊の頭(石像)(アゼンス・アクロポリス博物館)…… 8
石像マスク(アゼンス・アクロポリス博物館)…… 9
アルカイック像の頭(ベルリン博物館)……10
ヘルメスとニムフのアルカイック・レリーフ(アゼンス・アクロポリス博物館)……11
戰士のレリーフ(アゼンス・ナショナル博物館)……12
コリントのポセイドン立像(ブロンズ)……(アゼンス・ナショナル博物館)……13
アポロー(?)頭部(アゼンス・アクロポリス博物館)……14
犬と遊ぶボエオテイア人(アゼンス・ナショナル博物館)……15
戰車御者ブロンズ像(右)同上部(左)(デルフイ博物館)……16
アポロー像(オリムピヤ神殿破風の一部)(オリンピヤ博物館)……17
圓盤投げ(デイスコボロス)傳ミロ作(ローマ・ナショナル博物館)……18
パルテノン・アテナ立像(アゼンス・ナショナル博物館)……19
かゞくアテナ女神レリーフ(アゼンス・アクロポリス博物館)……20
ヴイナス誕生祭壇レリーフの二部分(ローマ・ナショナル博物館)……21
踊る女のレリーフ(ベルリン博物館)……22
棘を拔く少年像(ブロンズ)……(ローマ・ビカトール博物館)……23
パルテノン・フリーズ・レリーフの一部
(ポ・セイドン・デイオニソス・デミーター)(アゼンス・アクロポリス博物館)……24
エレクテイオンの柱像(アゼンス・アクロポリス丘)……25
ヘルメス像(右)同上部(左)プラキシテレス作(オリンピヤ博物館)……26
アテナ女神の頭(アゼンス・ナショナル博物館)……27
壯者の上部(ブロンズ)……(コンスタンテイノープル博物館)……28
アレキサンダー石棺側面(コンスタンテイノープル博物館)……29
アレキサンダー大帝騎馬像
(アレキサンダー石棺レリーフの一部)(コンスタンテイノープル博物館)……30
ピレウスのユープラキスの墓標(アゼンス・ナショナル博物館)……31
ピレウスのダマシストラテスの墓標(アゼンス・ナショナル博物館)……32
マンテイネイアのレリーフ
(アポロー・マルシアス・ミューズ)(アゼンス・ナショナル博物館)……33
球戲(上)相撲(下)(テミストクレス壁レリーフ)……(アゼンス・ナショナル博物館)…34
アルカイック・少女のレリーフ(ローマ・コンゼルヴアトリー博物館)……35
若き少女立像(ナポリ博物館)……36



562
57

562
57

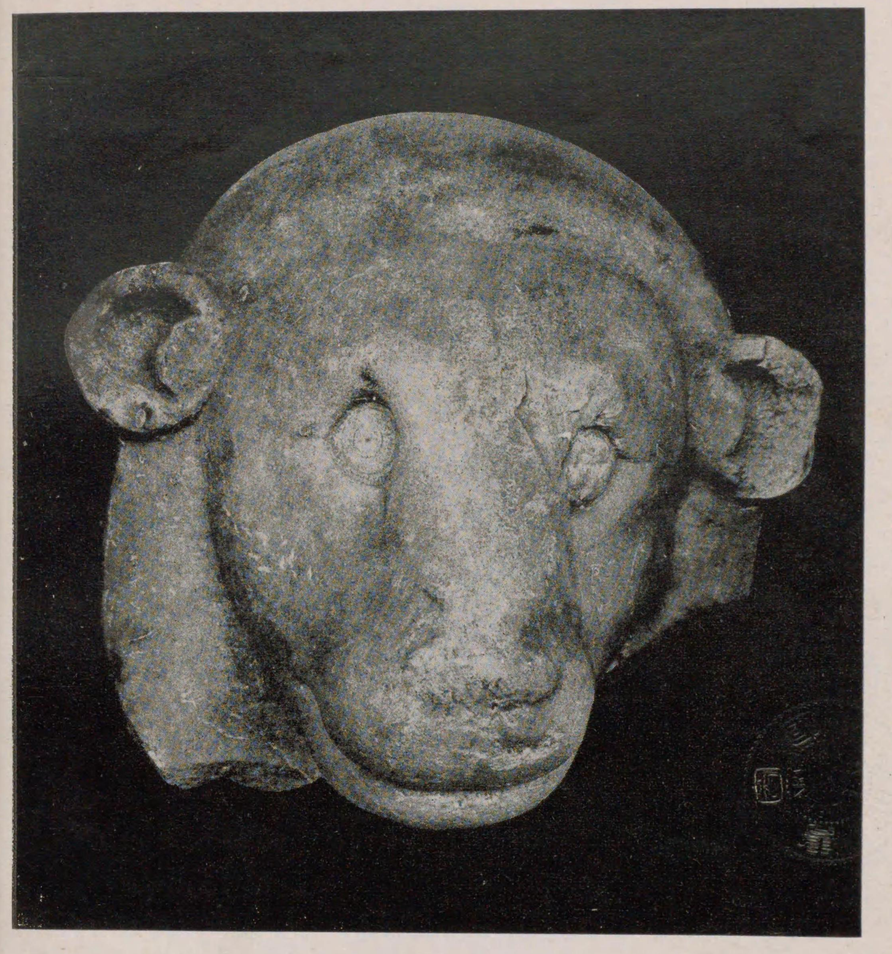
562
57

562
57

562
57

562
57

562
57



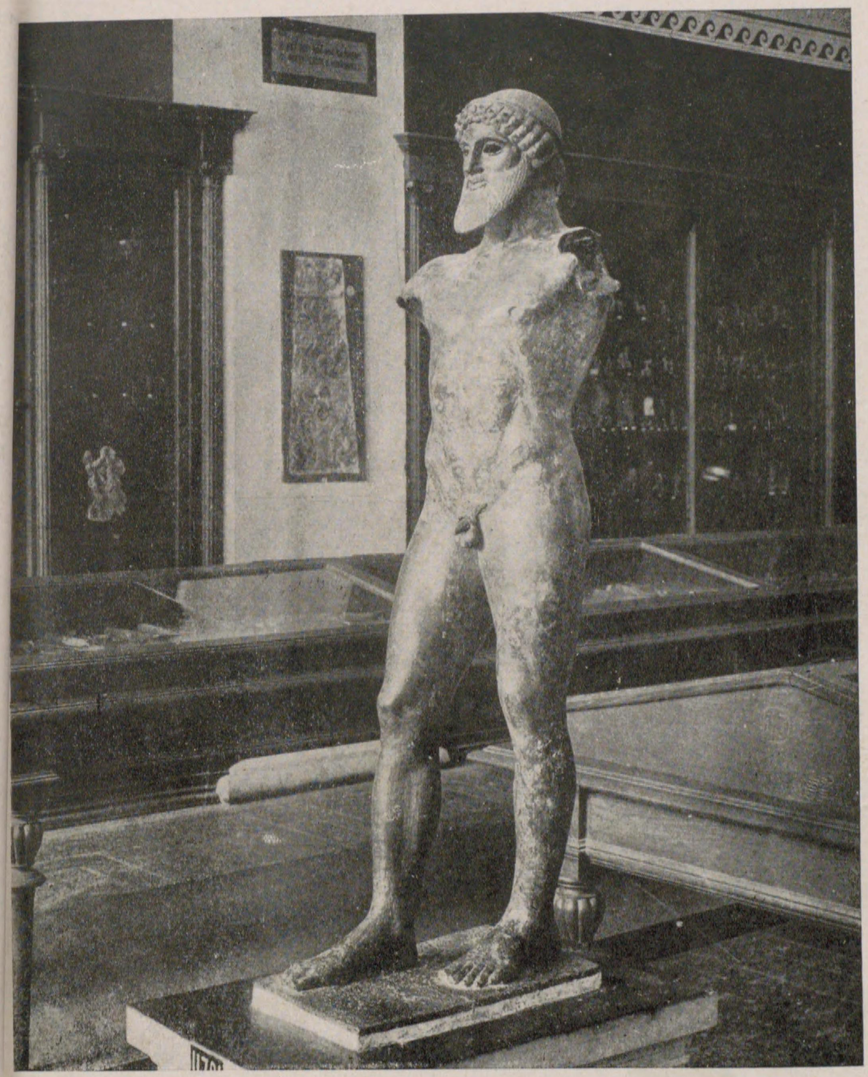
562
57

562
57

562
57

562
57

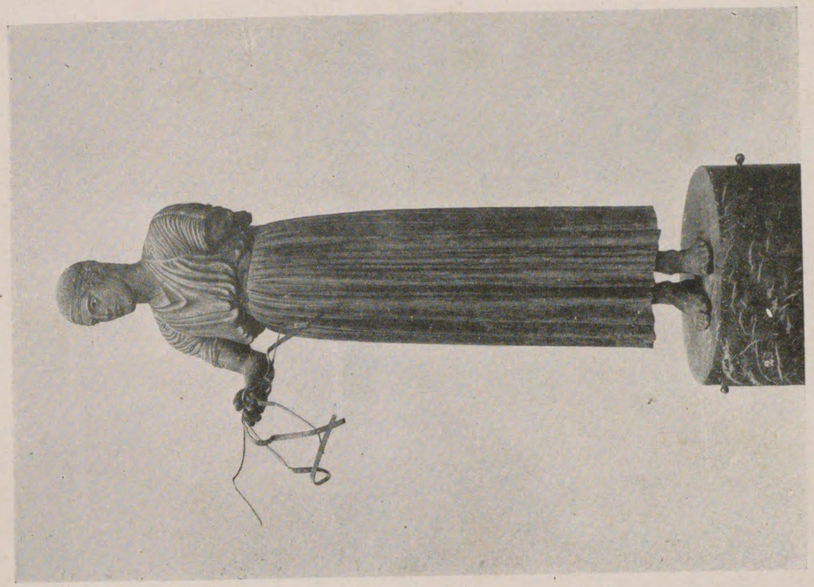
562
57

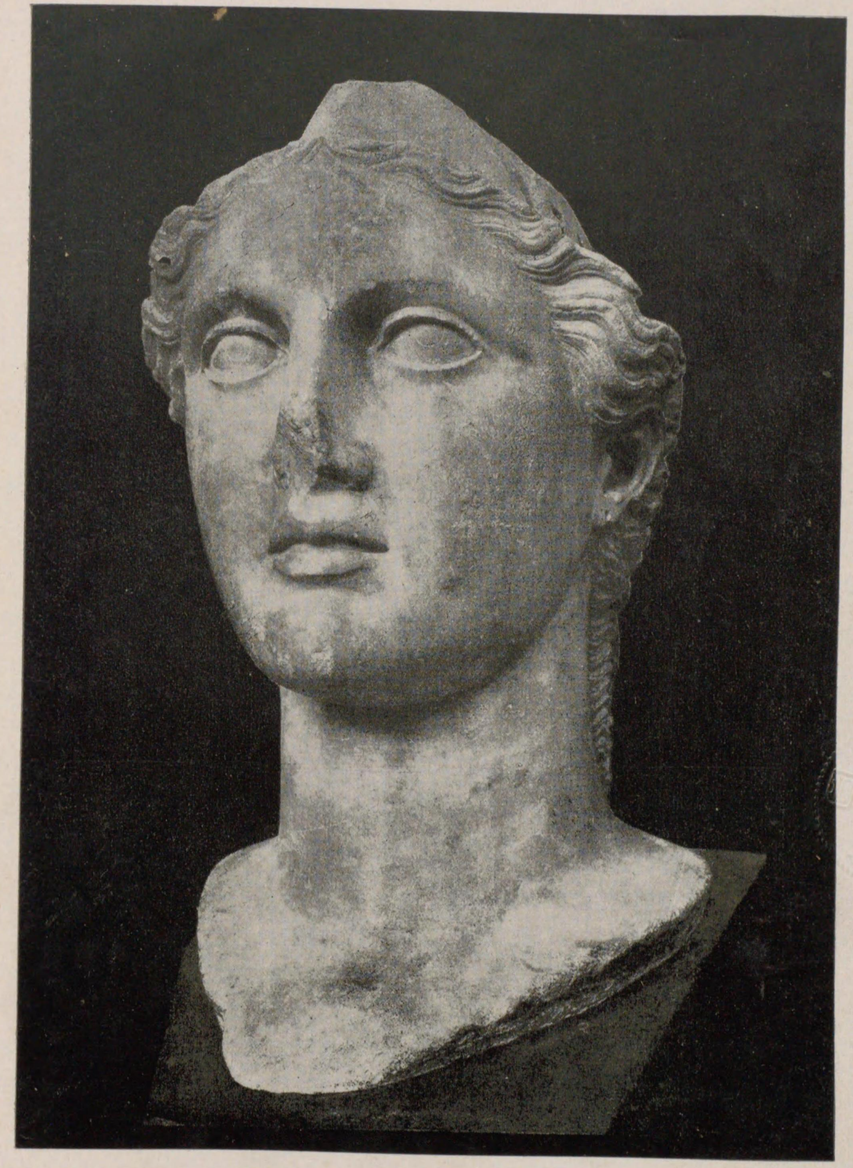


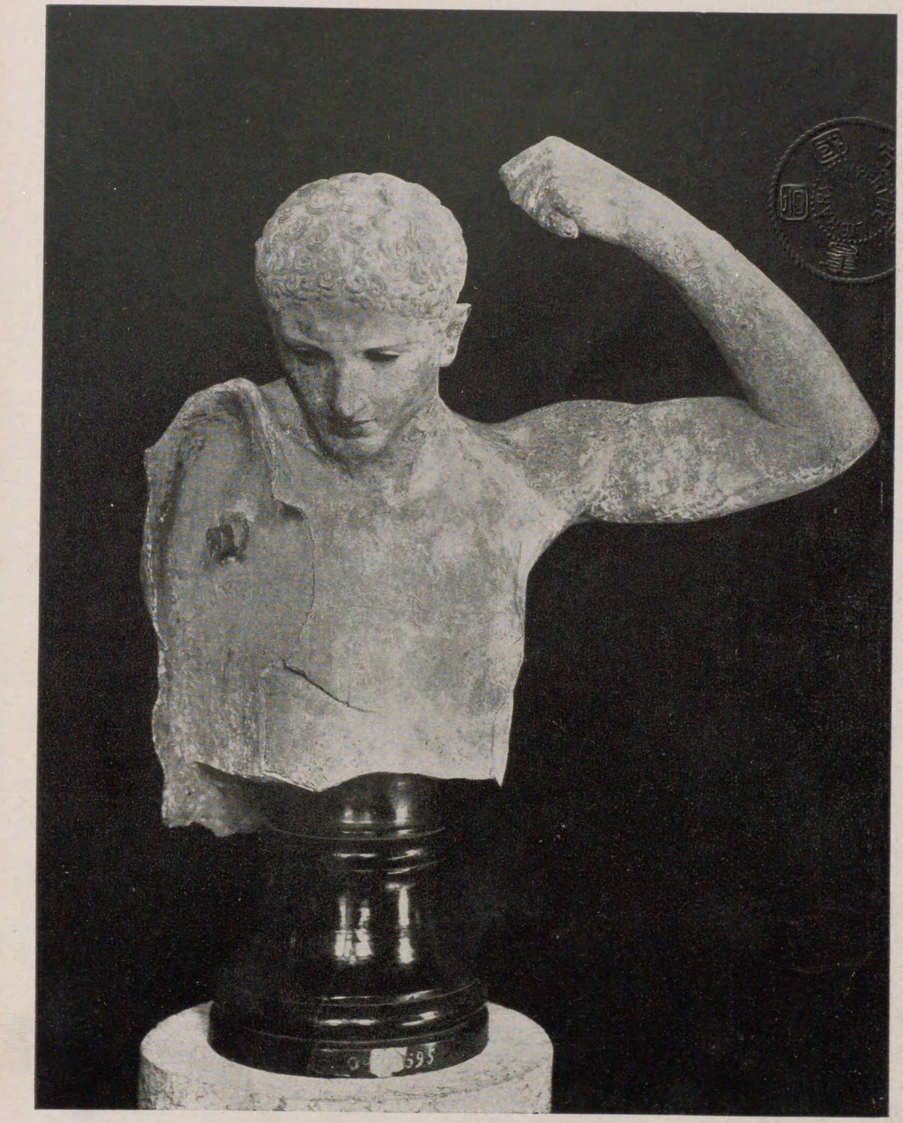
562
57

562
57

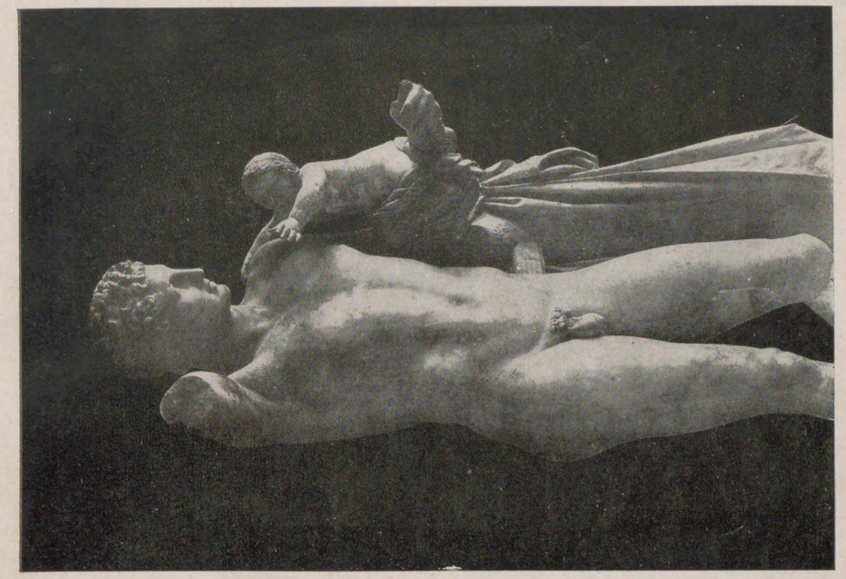
562
57

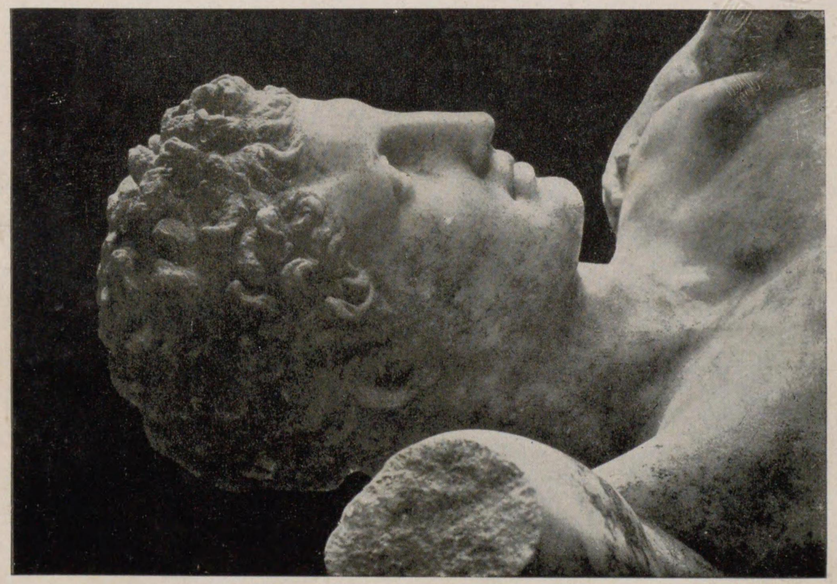


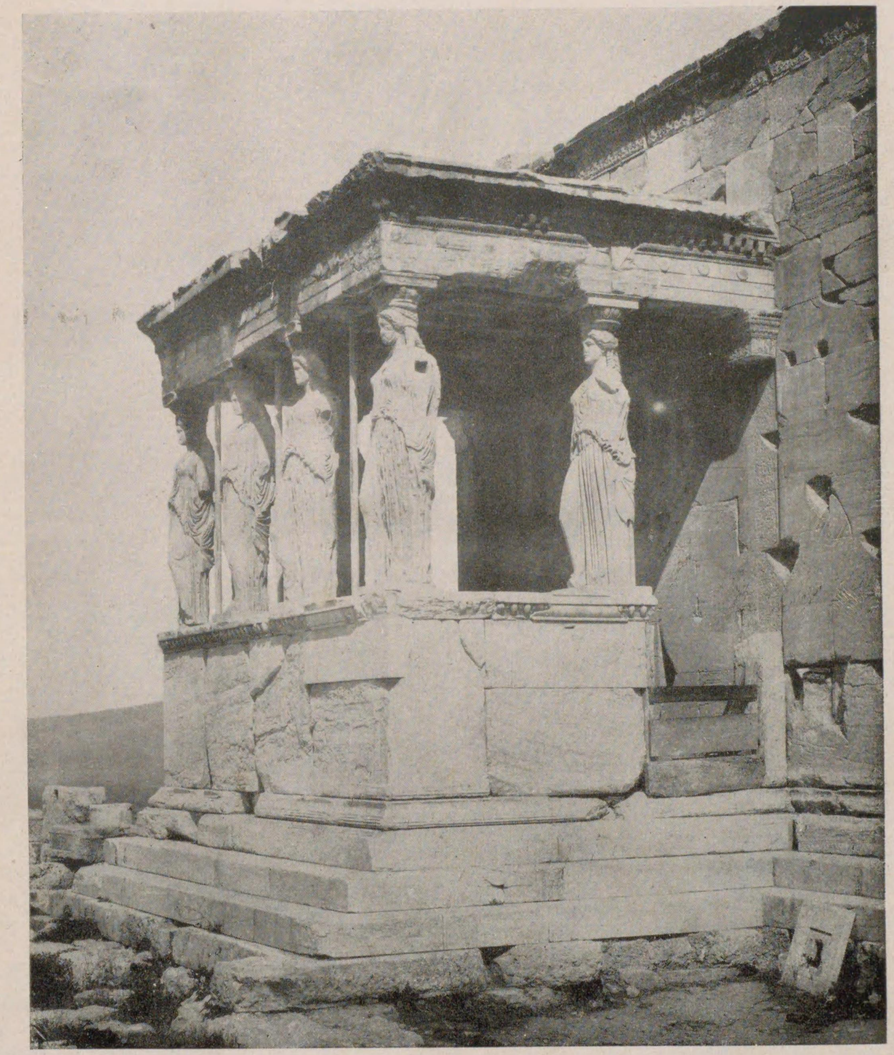




215







日附訂正

昭和二年一月八日

昭和二年一月十一日

~~大正十五年十二月廿五日~~印刷
~~大正十五年二十月廿六日~~發行　希臘彫刻集

東京市外大森新井宿一三九四
編輯兼發行者　北原義雄

東京市牛込區西五軒町三十四
印刷所　日能製版印刷所

東京市小石川區戸崎町七二
印刷所　沖田印刷所

東京市麹町區内山下町一ノ一
發行所　アトリエ社

電話銀座二四五六番　振替東京六六〇〇二

定價金二圓五十錢

瀟洒たる三つの畫集

正宗得三郎編 現代佛蘭西名家畫集

定價 ¥3.50
送料 ¥0.18

原色版十二葉　帽子を被れる女(ボナール)、風景(ボナール)、カルタ(ボナール)、男の顔(ドラン)、裸體(ドラン)、肖像(ピカソ)、赤い敷物のある靜物(ピカソ)、金魚(マチス)、西班牙風俗の女(マチス)、アネモネ(ドユフキ)、靜物(ブラック)、マルセエユ(シニヤック)
寫眞版十二葉　風景(ボナール)、魚(マチス)、林間讀書(マチス)、泉(ピカソ)、ペンを持てる女(ピカソ)、裸體(ブラック)、女君(ロオランサン)、女の肖像(ドラン)、假裝(ドラン)、風景(スゴンザック)、風景(ユトリロ)、曲馬の娘(ルオール)

名花繚亂たる現代佛國畫壇の新人偉才、玆に綱成配列よろしきを得て、何れも華麗な色彩、芳洌な香氣、清楚な風情、相交へて玲瓏燦然、恍惚として人は醉はされるであらう。面目新味な畫集である。

アトリエ社編 印象派畫集

定價 ¥3.50
送料 ¥0.18

原色版十二葉　水浴(ルノアル)、西班牙のギタ彈き(マネ)、西班牙の踊場(マネ)、雪景(モネ)、赤襯衿の娘(ルノアル)、朝の支度(ドガ)、ルウブル遠望(ピサロ)、風景(シスレエ)、メイ・ベルフフオード驛(ロートレク)、男の肖像(セザンヌ)、鐵橋(ゴオホ)、赤い犬のゐる風景(ゴオガン)
寫眞版十三葉　浴女(マネ)、葬列(マネ)、花園(モネ)、ベニス(モネ)、モレエの初春(シスレエ)、裏庭(ピサロ)、洗濯(ドガ)、風景(ルノアル)、エスタック風景(セザンヌ)、狂人の顔(ゴオホ)、老人の像(ゴオガン)、音樂會(ロートレク)、夏の日曜日(スウラ)

前期後期印象派の巨豪十一作家を會せしめて、各自悉く獨自の畫境躍如たる傑作を拔萃網羅し繪畫黃金時代の縮圖を見るやうである。色彩絢爛赫灼として、全卷目も眩ゆきものがある。原色版精巧無比。

アトリエ社編 泰西名家デッサン集

定價 ¥2.50
送料 ¥0.18

原色版二葉　農婦(ピサロ)、沓下を穿ける踊り子(ドガ)
寫眞版五十葉　デューラー、ミケランゼロ、ラファエル、ボッチセリ、ダビンチ、テイントレット、レンブラント、プウサン、ゴヤ、デルサルト、ルウベンス、ドラクロア、アングル、シヤヴアンヌ、ドオミエ、ミレエ、テオドル、コロオ、ホドラー、ルドン、セザンヌ、ロートレク、ルノアール、ゴツホ、ピサロ、ドガ、ゴオガン、コラン、マチス、ピカソ、ドラン、ボナール、ロオト、リイベルマン、ジムミ、ラツセヤ、ドニ、ロダン、マイヨル等

繪畫の中で、デッサンが如何に重要な位置を占めてゐるかは、言を俟たない。實に廣汎に亘つて蒐集した泰西古今のデッサンの名品傑作を滿載し、それぞれ特徴ある線と味は、開卷どの頁にも躍動してゐる。

東京市麹町區内山下町一ノ一 アトリエ社 電話銀座二四五六 振替東京六六〇〇二

現代洋畫壇の名寶

梅原龍三郎著 梅原龍三郎畫集

定價 ¥3.50
送料 ¥0.18

往年、梅原氏の佛國に在るや、ルノアールの野に育ち、南歐に彩華を養ひ、以來驚くべき官能の蠱惑と、畫品の芳洌と表現の不羈縱橫とを以て鳴り、更に今日東洋的風格これに滲澄して圓熟の境彌々到る。氏こそ、現代日本洋畫壇唯一無二の色彩畫家として、就中その得意の裸婦の圖は淸香凜然氏に匹儔するものなし。その眼醒ましき代表的傑作は滯歐作品より近作に至るまで氏の自撰によつて悉く本書に盛らる。

原色版十葉　自畫像、巴里の女、熱海、ナルシース、ベスビオとナポリ、靑磁に梨リンゴ、秋山、臥裸婦、江ノ浦、壺の菊
寫眞版十六葉　女の顔、洗足裸婦、モレー、讀書婦、ナポリ、首飾り、椿、座裸婦、座裸婦、南歐風景、座裸婦、座裸婦、座裸婦、江ノ浦の家、江ノ浦の山

中川一政著 中川一政畫集

定價 ¥4.20
送料 ¥0.18

中川一政氏は畫人にして詩人也。その作品に氣魂よく溢るゝもの、氏の如きは稀なり。至純直情なるその畫風は宛ら小兒の天眞と聰慧より出でたるに似て機微直ちに人に入る。例へばその好んで取材せる透明なる玻璃器の味感、或は凡常なる一自然を捉へて興趣盡きざる風景畫の手法、凜乎として人を穿つべし。本書に附する藝術觀隨筆、詩藻も亦氏の繪畫を愛するものゝ割愛すべからざる珠玉たるべし。

原色版九葉　春光、芋畑、監獄之橫、初冬、初夏水邊、靜物小品、厨房靜物、晩春新綠、野川
寫眞版十三葉　酒倉、霜どけの道、少女杉と茶畑、監獄之橫、村娘、村娘、村娘、中禪寺湖、靜物小品、初夏水流、靜物
附錄「虛實論」、「美術の眺め」、「隨筆」

石井柏亭著 石井柏亭畫集

定價 ¥3.50
送料 ¥0.18

日本洋畫壇の萠芽期より今日に至るまで、絕倫の資質と一貫不變の努力を持して、嘗々成し遂げた石井柏亭氏の畫業は、現代洋畫史上に特筆銘記すべきものの一つである。氏の畫風は堅實で、日本得精髓に秀で、非凡な要約の手練は深く徹して體得したる氏獨自のもの、今顧てその畫跡を辿り、快心二十六葉の傑作に觸れて、その潤達な筆力に長れ、その快適な畫境に心打たるものがある。

原色版十葉　荷蘭の子供、ガンの堀割、洞爺湖、厨、老太々、外套を被たる夫人、ナポリ灣、アスシヅの春、曇日-ヴエトイユ、湖畔の夕
寫眞版十六葉　机邊、ボンコマと其實物、紅蓮、農園の一隅、團扇を持てる女、茂木翁像、伊豆山、裸體習作、サン、ミツシエル橋、リツチモンド、O夫人像、ソレント、T女史の像、白龍の入江、工場

東京市麹町區内山下町一の一 アトリエ社 電話銀座二四五六 振替東京六六〇〇二

泰西名家の大列冊畫集

アトリエ社編・定價各二圓五十錢　送料十八錢　代金引換に應ず

ルノアール畫集

かくも甘美豐麗にして芳香馥郁たる女體の消息を語り盡し、人を陶醉の境に誘ふた畫家は古今ルノアールを除いてはその比を見ない。

ゴオホ畫集

燦々たる太陽！狂へる如き向日葵の花！此の異常な天才畫家の悉く畫境躍如たる傑作に接する者、誰か感動驚異せずに居られやうか。

セザンヌ畫集

たじろぎ深き凝視に徹して、自然の眞相を看破し、觸れば切々血の滲むばかりなる生命感。嶄然たる時代を劃せる近代繪畫史上の父祖。

ドオミエ畫集

微笑と皮肉を以て人生を諷刺した鬼才ドオミエの名は美術史上に獨一無二。人生の縮圖を巧みに示して、然も藝術味濃厚、表現犀利極りなく、測々として人に迫り來る。

ミレエ畫集

崇高にして純朴、牧歌的情趣津々たる、田園畫家ミレエの繪は、後代万人に親近の情を覺えしめ、殊にそのデッサンは我等に親しい。

ゴヤ畫集

繪畫を佛蘭西にのみ求める者にして、一度十八世紀西班牙に其眼を轉ぜんか、玆に燦然たる光彩を放てる藝術殿堂がある。

ダギンチ畫集

ダギンチの名は藝術史上の最高位に冠絶し、その雄渾壯大なるスケールは近代人の仰いで彌々鳴拜すべく、範となすべきもの。

ポンペイ壁畫集

噴灰の死都、ポンペイより發掘されたる驚くべき數多の神品は、凛冽たる藝術の香氣を現代に甦生せしめて、畫道の精髓を示した。

マチス畫集

マチスの線は直截簡潔、在來の線を一掃し、マチスの色彩は一抹にして清洌、色彩史上に斯の如き感覺の機微は未だ見ず。

ゴーガン畫集

セザンヌ、ゴオホと鼎立して後期印象派の巨壁。南海の孤島タヒチに詩境を得て、原始的生活と風物を描いた此の象徴的繪畫に魅せられよ。

各冊原色版四葉・寫眞版三十餘葉・小傳

東京市麹町區内山下町一の一　アトリエ社　電話銀座二四五六　振替東京六六〇〇二

562-57
1200501512583
562
57